「その高さ」

エペソ人への手紙３：１８－１９

May.14.2023

## エペソ人への手紙３：１８－１９（パワポ）

Preface

前回の説教では、キリストの愛の広さ、長さ、深さについて考えました
今朝は、キリストの愛の高さについて考えていきたいと思っております。

先ず、キリストの愛の高さを考えるにあたって少し振り返りたいのが、キリストの愛の深さについてです。

前回、キリストの愛の深さについて考える際引用した聖書箇所が、ピリピ書の２章の御言葉でしたが、覚えておられるでしょうか。
ピリピ書２章には、天地万物の造り主であられ、神の御姿なるお方であるイエス・キリストが、自らを低くされ、死にまで、十字架の死にまで従われたことが記されていました。
この上もなく高いお方が、この上もなく低くなられた。
意図して、神としてのすべての権利・権能をお捨てになり、放棄され、この上もなく低くなられたところに、深さが、神の愛の深さが、底知れぬ神の愛の深さが現れるということを見ていきました。

そして、その深さが深ければ深いほど、そこに現れるものがあります。
何でしょう？
高さです。
深ければ深いほど、そこに現れるのは高さです。

つまりなぜ、その計り知れぬ深みにまで、神であられる主イエス様が意図して、意志をもって陥って行かれたのか？
それは、その深みから、どんな存在も、どんな被造物も、その何をもってしても到底到達することも出来ず、罪ゆえに遥か向こうに仰ぎ見ることさえも出来なくなってしまった高さにまで、私たち罪人を引き上げるためです。
神であられるお方が本来おられた高さにおいても共にいると、いたいと、共ににいなければ神自ら決して満足することはないと、熱心をもって宣言された程に私たち罪人のことを愛され、愛しておられるということです。

即ち、「高さ」という言葉を用いて使徒パウロが言い表そうとしている神の愛とは、私たちのために、神様が究極的に、最終的に持っておられる目的のことです。
神様が私たちをその目的するところへと引き上げなさる高さを、私たちに思

い起こさせ、また、その高さにまで引き上げるために注いだ神の情熱を、「キリストの愛の高さ」と表現しているわけですね。

Part One

私たちの多くは、キリスト教で言う「救い」は赦しだと、あたかも罪の赦しこそが、イエス・キリストの愛のすべてだと考えてしまう傾向があるように思います。

イエス様が私たちの罪の身代わりとなって十字架に架かり死んでくださったことが、その愛のすべてだと、救いのすべてだと、そこに安住しようとする傾向があるように思うんです。

もちろん、イエス様の十字架によって罪赦されたということ程重要なことはありませんが、救いの目的は罪の赦しにあるのではなく、罪の赦しは通過点であり、罪の赦しを超えた先のもっと高い、神様の聖なる気高い目的があることを見落としてしまい兼ねないということです。

行くべき、到達すべきキリストの愛の高さについては考えが及ばなくなってしまい、いつまでも十字架上のイエス様の見るも無残な血潮滴る姿ばかりに感傷的に浸らなければならない、浸っていることが信仰だと思ってしまい兼ねません。

このような信仰姿勢をフラー神学校の私の指導教官であったキョン・スー先生は、「ドラキュラ信仰」と言っていました。

イエス様の血潮や十字架ばかりをセンチメンタルに幻想的に求めて、その生きる姿勢をもって愛を示すことを忘れてしまっているクリスチャンのことを「ドラキュラ信者」と仰っていました。

実際聖書を見てみますと、四つの福音書に書かれているイエス様の十字架の受難についての記述の分量は、拍子抜けするほど短く少ないんです。

私自身聖書を読んでいく中で、イエス様の受難について思ったよりもはるかに短く、簡潔で、感情移入することさえも簡単ではないほどに、さらっと書いてあることに疑問を持っていた時期がありました。

そして、何よりもイエス様ご自身、自らの十字架の苦難について語ることは、そんなに多くないんです。

つまり、十字架の贖い・罪の赦しは、決してなくてはならない神の救いにおける最も大事な重大要素であり、正に、神のキリストの深い愛の表れではありますが、罪の赦しは、救いの目的ではないということです。

罪の赦しは目的ではなく、手段だということを聖書は教えてくれます。

救いの目的は、もっと他のところに、パウロの言う「高い」ところにあります。

私たちが「救い」について考える時、ひとつ押さえておかなければならない大事な内容がローマ書にありますので、一度見てみたいと思います。

ローマ人への手紙６：１－８（パワポ）

イエス・キリストは、私たちの罪の身代わりとして十字架に架かられ、死なれました。
それゆえに、私たちの罪は赦されました。
私たちの代わりに死なれ、私たちの罪を贖って下さった。
神のひとり子罪なき主イエス様が身代わりとなって、罪の負い目を完済して下さったのだから、もし救いの目的が、私たちの罪の赦しにあるならばもう十分です。
それ以上何もすることはないですし、何か他に私たちに出来ることはありません。

なのに、使徒パウロはここで、イエス様の十字架の贖いと救いを説明するにあたって、「身代わり」という言葉を使う代わりに、「ともに」という言葉を何度も使います。
「キリストとともに葬られ、キリストとともに十字架につけられ、キリストとともに死に、キリストとともに生きる」と言います。
「キリストが私たちの罪の**身代わり**となって罪を贖って下さった」とは言わずに、「キリストとともに葬られ、キリストとともに十字架につけられ、キリストとともに死に」と言うんです。
さらには、「キリストとともに生きる」とまで言います。

つまり、イエス様の十字架の死を眺めながら、「ああ、僕の罪は赦された」とイエス様とは別のところで離れたところで、私の、僕の人生を生きるのが救いの目的ではなく、「ともにいる」いうのが、救いの目的だということです。

イエス様とともに死を通り、イエス様とともに行かなければならない、イエス様が意図しておられる**栄光の目的地に、**イエス様とともに辿り着くことが救いの目的であり、その目的地に辿り着かなければならないのが私たちだということです。
罪赦されてはい終わりではなく、罪赦されてなお、罪赦されたからこそ、イエス様とともに辿り着くべき高みがあるということです。

辿り着くべき目的地・辿り着くべき高みは、場所としての目的地や高み、つまり、天の御国だったり、新しい天と新しい地だったりがあると同時に、霊性品性としての辿り着くべき目的地・高み、神の御前に聖なる傷のない者にしようとしておられることだったり、御国を受け継ぐにふさわしい神の子らしい御霊の実が成ることだったりとがあります。

でもだからと言って、それらの目的地や高みに辿り着くことが救いの目的なのかというと、そうではなく、目的はあくまでも「ともにいる」ということです。

「ともにいる」結果、神と、キリストとともにいる結果、副産物として当然のように伴なってくるのが、天の御国だったり、御霊の実だったりであって、その副産物が救いの真の目的ではありません。
神とともに、キリストとともにいることが、神の救いの真の目的です。
もしともにいないならば、「ともにいる」という真の目的から外れているわけですから、天の御国とか、御霊の実とかの副産物は付いて来ないかもしれない。

真の目的は、今、使徒パウロが語っていますように、「ともにいる」ということです。
キリストとともに、父なる神とともにいなければならない者たちが、私たちだということです。

Part Two

ヨハネの福音書１７章に行ってみたいと思います。
先週、神田明美先生がメッセージの最後でお読みになった箇所ですが、イエス様が十字架に架かられる前に血の汗を滴らせながら祈った祈りにも、「ともにいること」こそが、イエス様が十字架に架かられた目的であるということが説明されています。

ヨハネの福音書１７：２１－２４（パワポ）

ここで「彼ら」と称されている私たちが、神に愛されたことを何をもって証拠とするのか？
「父なる神がイエス様とともにおられ、イエス様が父なる神とともにおられるように、彼らも、私たちも、父なる神とイエス様とともにいることをもって、神の愛が表れる」と、命を懸けた祈りのうちにイエス様仰います。

愛は、見ないで、会わないでいることを我慢できません。
愛するとは、くっ付いていなければ気が済まず、いつも一緒にいたくて、どんな喜びも分かち合いたくて、どんなことにおいても秘密がない仲になりたい、なることです。

また愛とは、愛する対象・相手に向けて、どれだけ熱心を、情熱を持っているのかということでもあります。
どういう情熱か？
愛するその人とともに、何一つ違いや差があるように所有することが出来ないという情熱です。
私にもし、分けることの出来ない宝物があったとしたら、私がそれを所有するでしょうか、それとも愛する人にそれを所有させるでしょうか？
もし愛があるならば、その宝を、愛する相手にあげるのが愛です。

ではもし、それが、分かち合うことの出来ない痛みならば、その痛みは誰が持ちますか？
愛する人ではなく、その痛みを自分が持とうとするのが愛です。
私たちは今まで、宝は自分で、痛みは相手にという風に生きてきてしまってはいないだろうかと考えさせられます。
でも、愛は違います。

２４節のイエス様の祈りに、その愛が良く表れています。
「彼らもわたしとともにいるようにしてください。わたしの栄光を、（主イエス様の栄光を、）世界の基が置かれる前から父なる神の愛の証しとして与えられているその栄光を彼らとともに見るため、彼らとともに享受するため」にと、イエス様は、ご自分のみに許されている栄光を私たちと一体となって、ともに持つと仰るのです。

これこそ、愛する者が、愛している相手に対して持つ当然の情熱と熱心です。
神の熱心であり、キリストの熱心であり、私たちに向けられている愛とは、ある意味神様の聖なる執着であり、聖なる欲とも言えるかもしれません。

ですが、ここで問題になるのは、「ともにしたい」と仰っておられるその栄光をとてもじゃないけれども、一緒に持つことなんか出来ない罪人であるというのが、私たちの持つ根本的な問題です。

ちょっと語弊がある表現かもしれませんが、神様は聖なるお方ですから、罪が我慢なりません。
罪と共存するなんていうこの被造世界最大の矛盾の入る余地なんか一滴たりともない、そうしたいとたとえ思われたとしても、そうお出来になれない聖なるお方が神様です。
唯一神様がお出来になれないことがあるとすれば、それは、罪との共存、罪と交わることです。

聖書で神様は、罪を、罪人を闇に例えておられますが、なぜ、闇に例えなさるのかと言いますと、光と闇は共存できないからです。
光の前にあって闇が存在出来ないように、もし、神の栄光の御座の前に私たち罪人が出て行ったならば、神様が望んでおられなくても、溶けて跡形もなく消え去ってしまいます。
つまり、私たち罪人は、神の栄光の前に破滅して然るべき存在だということです。

光の前に闇が立つ瀬がないように、私たち罪人は、神の栄光の前に溶けて消えて無くなってしまうしかない存在です。
闇が光の前に消えて無くなるように、私たちはその罪ゆえに、神のご栄光の前

に死んでしまうしかないのです。
　光と闇の境界線は死です。
　死が罪の報酬です。
　私たちが真正に神の御言葉に突き合わせて、私たちという存在の本質を正直に見つめるならば、神の言葉ではなく、私たちの方こそ死んで、滅びて当然の者たちです。
　ただ安らかに死を迎えるのではなく、臼に入れて杵で挽いてしまっても安いぐらいの罪人です。

　にもかかわらず、神様はそうはされません。
　安らかに死なせても大きな恵みなのに、その罪を許してくださるばかりか、栄光の座にまで、ともにおられると宣言し、要求なさるのです。

　そして、その自らの要求を満たすために、神の御姿であられるイエス様を通して、イエス様とともに、イエス様は私たちとともに、私たちをその懐に抱き、死の橋をともに渡られ、死の底なしの深い闇へとともに落ち、ともに死なれました。
　そして、ともに生きました。
　「私たちがキリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きることにもなる」とローマ書で言っている通りのことを神様興されました。

　神自ら私たちとともに死なれたことをもって、天地万物を納得させ、神様というお方はどこまでも正しいことをねじ曲げたり、間違っていることを義とはされない聖なるお方であることを示し、私たちを神とともに栄光に与る者へと、堂々とその懐に抱いて、神とともに一体となる者へと変えて下さいました。

　即ち、主イエス・キリストが、私たちのために十字架に架かられたカルバリ山の歴史的事件の究極的な目的は、死んで地獄に落ちてしまう私たちのことを可哀そうに思い、罪を洗い流してあげる程度のことではなく、もちろん、それも物凄いことですよ。
　でもそれ以上に、父なる神と主イエス様の御心を察するならば、私たちに向けて持っておられるその愛ゆえに、私たちが栄光の座へ「ともに」着くまでは、神は、イエス様は決して満足されることはないという意味です。
　何かことを成すことが十字架の目的ではなく、その愛がそうさせた、その愛が本当の愛であるがために、本当の愛ならばやって当然のことをしたまでだと、「ともにいる」という愛を捨てることなんかお出来にもならず、神は、イエス様は捨てたいとも思われなかったということです。
　これが、聖書が最も重きを置いて主張していることです。

## Part Three

　また聖書は、このイエス様の愛ゆえに成し遂げられた「ともにいる」という栄光の共有を何をもって証拠付けているのかと言いますと、使徒の働きに書いて

ある聖霊降臨です。
　イエス様が十字架に架かられ亡くなり、復活して４０日間弟子たちに現れなさって、天に昇られてから１０日程経った五旬節ペンテコステの日に、聖霊が人々に下り、その人々の霊と肉体を満たしたということをもって、イエス様の十字架の愛の結果として成し遂げられた栄光の共有の実現を宣言します。

　聖霊に満たされて異言を語ったとか、人々の病を癒したとかというのも大事なことだとは思いますが、それよりもはるかに大事なのが、父なる神、御子なるイエスと同じ神であられる聖霊なる神が、人とともにいることが出来るようになった、主イエス様の十字架ゆえに、人とともに神が共存することが出来るようになったということが、ペンテコステの聖霊降臨における最も大事な要点です。

　イエス様の別名は、ニックネームは何でしょう？
　「インマヌエル」ですね。
　では、「インマヌエル」とはどういう意味でしょうか？
　「神が私たちとともにおられる」という意味です。
　つまり、聖霊降臨をもって、主イエス様の十字架の死をもって、人の罪を圧倒的に綺麗さっぱり打ちのめして、「神が私たちとともにおられる」ということが成就されたと示すわけです。

　私たちが成就したわけではありません。
　成就どころか、私たち罪人の間に来られた義なるお方、光が来ると、その光を闇をもって消してしまったのが、私たちです。
　例えば、大きな怪我をして、顔がひどい有様になり、手術をして包帯をぐるぐる巻きにしてはいたものの、やっぱり何か様子がおかしいと包帯を解いて鏡を見てみたら、目も覆いたくなるような姿がそこに映っていました。
　すると、人はどうするでしょうか？
　自分の顔を掻きむしってさらに傷を付けるのではなく、十中八九、鏡を割ってしまうのが私たち人間のやり方です。
　それと同じように、光あられるイエス様を、私たちは死へと追いやってしまいました。

　ですが、イエス様が、私たちのその闇なる罪とともに死なれたことによって何が可能になったのかと言いますと、聖霊なる神様が私たちの内にいらっしゃることが出来るようになりました。
　そして、その栄光なるお方が私のうちにいらっしゃっても死ぬことはなく、罪人であった私たちが罪人ではないという座に着き、神とともにいることが出来るようになったということを歴史的に証明したのが、ペンテコステの聖霊降臨という事件です。

　キリストを信じる者たちには誰にでも、その内に聖霊なる神が来ていて下さ

っていると、聖書は私たちに教えてくれます。
　このことが、天地万物において普通のことではない、驚愕しても驚愕しきれないほどの驚くべきことだということの自覚を私たち持つ必要があります。

　ヨハネの福音書のイエス様の祈りの通り、父なる神と御子なるイエスと聖霊なる神とともに、ひとつとされました。
　キリストとともにいる者となり、キリストの名によって存在するものであり、その身分が罪人から栄光へと変えられ、使徒パウロの言葉に倣いますと、私たちの国籍は天にある者たちとされました。
　神のおられる天ほど高いものはありませんので、ここに高さが現れます。
　キリストの愛の高さが現れます。

Part Four

　では私たちは、そのキリストの愛の高さをどのように用いているでしょうか？
　愛を用いるという言葉自体おかしな表現ですが、私たちともすると、その愛のうちにひとつであり、その栄光の愛に入れられている入っているという自覚よりも、どうすれば、その愛を利用することが出来るだろうかということばかりに執着してしまいます。

　主イエス様は、今も変わらず、私たちのために執り成していて下さっており、神様とイエス様とひとつとなり、ともにある栄光のうちに、その交わり自体をこの上もなく喜んでおられますが、私たちと言ったら、そんな神様の思いは露知らず、私の人生に神様がどんな能力を、どんな力を、どんな見返りを、どんな賜物をお与え下さるかばかりに集中して、神様そのお方その存在そのものを尋ね求めようとは中々致しません。
　病を癒して下さるから、物を下さるから、お金を下さるから必要であって、神との交わりそのものが目的であり、神そのお方その存在そのものを必要としてはいないのではないかということです。
　すると、それは、もう愛の関係ではなくなってしまいます。

　なぜそうなのか？
　それはまだ、神様がイエス・キリストをお送りになって、私たちに意図しておられる目的が何なのか、愛しておられるということが何なのか、神様が私たちに求めておられる栄光の座が何なのか、どこなのかを分かっていないからかも知れません。

　ピリピ人への手紙３：１７－２１（パワポ）

　神様は私たちをどの高みにまで引き上げなさろうとしておられると言っていますか？

この体までも、この卑しい体までも、ご自分の栄光に輝く体と同じ姿に変えなさろうとしておられます。
頭の先から、足の爪先に至るまで、綺麗さっぱり何の落ち度も、何の欠陥もない栄光の姿に、その栄光の座に至るまで、愛する者としての情熱と熱心を持っておられると言います。

「知ってか知らずか、十字架の敵として、欲望を神として、恥ずべきものを栄光として、地上のことだけを考えている世界に囲まれているうちに、自分もそうなってはいないだろうか」と、「主イエス様の燃えるような高い愛が分かっているだろうか」と、「気付けているだろうか」と、毎日悩みます。

## エペソ人へ他の手紙５：２５－２７（パワポ）

適当に汚れを落として、適当に濯ぐ程度ではなく、「しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なる傷のないものとして栄光の内に、私たちをその御前に立たせる」とまで仰います。
これが、イエス様が私たちを愛しておられる愛の高さです。
物凄い表現ですが、果たして、私たちは、この表現に表されているキリストの愛をどれ程に理解しているでしょうか？
キリスト者と言われていること、クリスチャンであること自体がどれほど深刻で、祝福で、とんでもないことなのかを覚えることが出来ているのかと考えさせられます。

その高い愛の中にともにいるという事実があってしてもなお、欲望を神とし、恥ずべきものを栄光とし、十字架の敵として歩むことに甘んじているならば、自らを汚しているばかりか、その神の高い愛に対しての冒涜にもなります。

神様は、私たちのことをあり得ないぐらいに愛しておられます。
「私たちという存在がいないと生きられない」とまで、自らおられ、自ら存在し、天地万物をお造りになったお方が、私たちのように背を向け背いた罪人なんか一掃してしまい、また始めから造り直せばいいだけのことなのに、そのような方法を選ばれることはなく、イエス・キリストを十字架につけ、血を流させ、私たちを直し、再び栄光の座へ私たちとともにいることを熱望しておられます。
そのように、神様は私たちのことを愛しておられます。

その愛の高さを私たちが知った時、気付いた時、ようやく初めて、私という人が何者なのかが分かるようになります。
そして、私たちは私たちにどんなに悪事を働いた人を前にしても、誹謗中傷を浴びせることも憎むことも出来ない、広く、長く、深く、そして高い愛の経験の内にあって、すべてが満たされ、すべてを益とされる満たしへと導かれて行くのです。

だから、敵を愛することは不可能なことではなく、キリストの広く、長く、深く、高い愛を知るうちに可能にされていきます。

Conclusion

私たちの戦いは、敵と戦ったり、祈って神様に何かを与えられるために努力するような戦いではありません。
もうすでに与えられている愛を知っていく戦いです。
神の愛は、応えるものではなく、知っていくものです。
その愛を悟れば悟るほどに、その愛を知れば知るほどに、私たちは、広くされ、長くされ、深くされ、高くされます。
そして、霊性が、品性が変えられていく戦いです。
だから、いつでもクリスチャンを測る物差しは、私たちとともにいて下さっている聖霊の実ですね。
愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制などです。

私たちの毎日の日常の中で起こるありとあらゆる出来事、苦しみや困難自体が問題なのではなくて、そのことを前にして、私たちがどのような姿勢で、どのような霊性と品性で対処していくのか、その中に神の御心と神の愛を見出していくために必要な訓練として存在しているのであって、「誰々の苦しみは、私の苦しみに較べれば楽よねえ」とか、「何で私にばかりこんなことが起こるのだろうか？」と比較するようなものではありません。

神様から見て、私たちに足りていないところを満たすために、訓練するために、しわもしみも一つもない者へと変えるために必要なところを直すために与えられているだけのことです。

そして私たちは、いよいよ、ついに、結局は、神の広く、長く、深く、高い愛によって、しみもしわも傷ひとつない者として聖なるものとして、完成されることでしょう。
そうして、永遠に主とともにいるようになります。

もしかして、主がともにいて下さることよりも、主が下さるお金がもっと必要ですか？
そうなったら、いけないですね。
主のようになりたいと思うのです。
主のように、「ともにいること」に、愛を見出す者でありたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ書３：１８－１９